

称号及び氏名	博士（人間科学） 太田 秀樹
学位授与の日付	平成23年3月31日
論文名	心の「分裂」についての臨床心理学的研究
論文審査委員	主査 川戸 圓
	副査 川原 稔久
	副査 宮脇 幸生
	副査 橋本 朋広
	副査 川部 哲也

論文要旨

本論文の目的は、精神の異常である心の「分裂」について、精神病理学（Bleuler）および精神分析学（Klein や Matte-Blanco）の先行研究を検討した上で、それらの先行研究に欠けている新しい視点を事例研究によって実証することである。その事例研究では、Jung 心理学を拠所として、心の「分裂」を如何にして理解することが出来るのかを提示した。

序章第1節では、研究テーマを定めた理由について論じた。心理療法を実践する中で、筆者は心の「分裂」が薬物療法によって治癒されるとは限らないこと、治療関係がしっかりと形成されているクライアントは、そうでないクライアントよりも心が「分裂」した状態の再発を容易には繰り返さないこと、たとえ再発したとしても回復が早いこと等を経験した。これらの経験を通じて、心の「分裂」について臨床心理学的に考察していく必要性を感じたことが、その理由である。

序章第2節では、心の「分裂」を、心理療法を通して理解していくには、臨床心理学的観点からの見立てが重要になることを論じた。筆者の言う臨床心理学的観点からの見立てとは、精神医学的診断をはじめとした幾つかの判断を拠所として、心の「分裂」について、症状把握だけではなく、それが如何なる病

態水準におけるものなのかを客観的に判断し、クライアントについて分かっている事実と、その事実の背後にある分らないこととを明確にして、分らないことを臨床心理学的に見立てていくことである。この見立ては、クライアントについての理解が深まるとともに変わっていく可能性があるため、その都度見立てを心理療法の過程で変えていく必要がある。つまり、心理療法が進展していくとともに、心の「分裂」の背後にある分らないことについての理解が深まり、クライアントの心的世界についての理解も深化していくことになる。したがって、心の「分裂」を理解するには、心理療法が進展していく中で、心の「分裂」の背後にある分らないことを如何に理解し深めていくかが極めて重要な問題になると言える。

次に、Bleuler, Klein, Matte-Blanco らの心の「分裂」についての考えを概観した。

第1章では、Schizophrenia を概念化した Bleuler を取り上げ、彼が心の「分裂」を器質障害である脳障害だと考えていたことを論じた。第2章では、0歳児の心的世界の重要性を強調した Klein を取り上げた。彼女の立場から見た心の「分裂」とは、早期心的防衛機制の「分裂 splitting」や「投影」が働くことによって表現される無意識的幻想 phantasy, すなわちイメージとして体験されるものであることを論じた。第3章では、Schizophrenia の思考障害の研究を通して無意識の2つの思考原理——「対称の原理 the principle of symmetry」と「非対称の原理 the principle of asymmetry」——を抽出した Matte-Blanco を取り上げた。彼の立場から見た心の「分裂」とは、無意識の働きという観点から見た場合、「非対称の原理」よりも「対称の原理」が優勢に働くことによって起きるものであり、また無意識の性質という観点から見た場合、無限性によって起こるものであることを論じた。

以上のことから、心の「分裂」について、Bleuler がそれを脳障害によるものとしたことに対して、Klein や Matte-Blanco は無意識そのものへと考えを深めていったことが分かった。すなわち、心の「分裂」は精神病に限って認められるものではなく、人間誰しも起こり得るものであるという理解へと進んでいったのである。しかしながら、Klein の言う無意識的幻想（イメージ）の内容は母子関係に基づき、Matte-Blanco の言う無意識の思考原理は無意識の性質か

ら抽出されたものであることから、それぞれの無意識についての理解は無意識の一面を捉えたものであると言え、それ故心の「分裂」についても、無意識の一面を通じた理解に留まっていたのである。

したがって、筆者は両者とは異なった観点から無意識についての理解を深め、心の「分裂」を捉えていくことを目指し、第2部において筆者が心理療法を行った事例を通して考察を進めていった。

第2部第5章では、重篤な精神病理を持つ事例Aとの心理療法過程を提示し、考察を行った。第6章では、入院中に実施した、統合失調症である事例Bとの心理療法過程を提示し、描画を中心にして考察を行った。第7章では、主治医によって病態が人格障害水準にあると判断された事例Cとの心理療法過程を提示した。その中で、夢を中心にして考察を行った。第8章では、非定型精神病と診断された事例Dとの心理療法過程を提示し、考察を行った。第9章では、不登校男子高校生である事例Eとの心理療法過程を提示した。短期間の心理療法であったが、その中で作成した箱庭を中心に考察を行った。第10章では、登校渋りに陥った小学男子児童の事例Fを提示し、箱庭療法とプレイセラピーの過程を通して考察を行った。

第11章では、以上の事例研究を通して、心の「分裂」について、その理論とまとめを提示した。

上述したように、心の「分裂」を理解していくためには、心理療法を始めるに当たり、臨床心理学的観点からの見立てが重要になる。そこでは、クライアントのパーソナリティ特徴、心の「分裂」、その背後にある意味等を見立てていくことになる。これらを見立てることによって、治療者はクライアントと自身との関係性を予測出来、治療的態度を明確に定めることが出来る。特に、この治療的態度は、治療関係の構築にとって非常に重要となる。その態度とは、クライアントの言動に耳を傾けること、すなわち傾聴することである。傾聴する態度を取り続けることによって、クライアントと治療者との関係は次第に深まり、治療関係が構築されていくことになる。この時、クライアントと治療者との間には、無意識のレベルでも、しっかりとした繋がりが生まれていくのである。無意識のレベルで両者が繋ると、提示した事例のように、箱庭、夢、描画、プレイといったイメージ表現が自発的に、自律性を伴って生まれ、展開してい

くことになる。自律性を伴ったイメージが展開することにより、心の「分裂」の背後にある意味は次第に、心的変容という重要な意味（物語）として明確になっていく。自律性を伴ったイメージは、Jung（1964）が述べたように、記号が意味するような、それと分かるものとは全く異なり、意識の把握を超えた意味内容、すなわち集合的無意識 *the collective unconscious* の内容を含んでいる。このことから、心の「分裂」は、第1部で述べた Klein の母子関係を巡っての無意識的幻想とも、Matte-Blanco が焦点を当てた無意識の性質とも異なった無意識の側面（深層）——集合的無意識——と繋がっているとと言える。

以上のことから、心の「分裂」を集合的無意識と繋がったものとして理解することが出来るのは、治療者とクライアントとが無意識のレベルで結びついた関係性が生まれているからだと言える。

さて筆者は、このような関係性が生まれることに繋がった臨床心理学的観点からの見立ての立て方を、クライアントに応じて工夫している。何故ならば、クライアントについての情報、精神状態や病態などには、クライアントによって違いがあるため、見立ての際に無意識をむやみに刺激する危険性があるからである。したがって、無意識に対して侵襲的にならぬように見立てを行う必要がある。そして、この見立てによって定めることが出来た治療的態度—傾聴すること—においても同様に、無意識に対して侵襲的にならぬよう努めなければならない。すなわち、筆者が行った傾聴とは、単にクライアントの話聞くことではなく、その言動に耳を傾けていると自ずと湧き上がってくる想像（ファンタジー）を、解釈としてクライアントに返さずに、それを通して、クライアントの「現実 *actuality*」（木村，1994）に参入していくことを意味する。したがって、上述した臨床心理学的観点からの見立てと傾聴を行うからこそ、既述したようにクライアントと筆者とが無意識のレベルで繋がり、無意識（イメージ）の自律性が働くことになるのである。

以上のことから、無意識のレベルで繋がった2人の関係性とは、精神分析学派の言う転移・逆転移の水準のものではなく、Jung（1946/1994）が分析した、両者が無意識において「結合 *coniunctio*」した関係性を意味すると言える。

第3部において、総合考察を行った。

心の「分裂」を理解する上で重要なことは、心の「分裂」の背後に、心の「分

裂」状態に陥った苦悩（死）と、心的成長の可能性（再生）との両方が存在し、個性化 *individuation* への可能性が秘められている、という視点を持つことである。この視点を持ち、クライアントの無意識（イメージ）の自律性に信頼を寄せ、個性化の過程にクライアントと共に治療者が参入することによって、クライアント一人一人の心の「分裂」の背後にある意味——それぞれの個性化——が浮かび上がってくるのである。このように、心の「分裂」という異常の中に、心的変容の可能性を見抜いていくことこそが臨床心理学的理解であると、筆者は考える。

以上論じてきたように、筆者が考察した心の「分裂」は、Bleuler, Klein, Matte-Blanco が考察したものとは異なっている。すなわち、心の「分裂」には、無意識の深層、すなわち集合的無意識と繋がった重要な意味——個性化への可能性——が含まれているということである。臨床心理学的観点から見立て、傾聴し、クライアントと治療者が無意識のレベルで「結合」することを基盤にして、心の「分裂」の背後にある意味が理解出来るのである。但し、上記のように、筆者は心の「分裂」の理解を、集合的無意識を視野に入れて、明らかにしようと試みたが、無意識そのものほどこまでも広く、深いものであるため、各事例における無意識（イメージ）の理解には終わりが無い。しかも、クライアント一人一人との治療関係を如何に構築していくのかを、個々に考えていくことでしか、一人一人の無意識の一面に触れていくことは出来ないため、心の「分裂」の臨床心理学的理解を深めることは、常に課題であり続ける。

学位論文審査結果の要旨

本論文は、心の「分裂」という心理臨床実践の根幹に関わる問題を論じ、表層では心が「分裂」しているかのように見える現象が、心の深層（集合的無意識）においては、豊かな「結合」の可能性を秘めていることを、著者の自験例（六例）から明らかにし、心の「分裂」についての新たな視座の獲得を試みたものである。

以下、人間社会学研究科人間科学専攻における博士論文審査基準に従って、審査委員会の所見を述べることとする。

1) 研究テーマが絞り込まれているか

本論文が取り上げるテーマは、心が分裂するという精神の状態が従来の心理療法では異常な事態と認識され、ネガティブなものとして捉えられる傾向にあったのだが、これをただ単にネガティブなものとして捉えるにとどまらず、そこに豊かな可能性が秘められていることに着目することで、心の「分裂」の概念の再構築を試みたものである。このテーマは本論文の中心軸をなし、その軸は論文の初めから最後まで貫き通され、論文全体がこのテーマの考察に収斂されている。すなわち本論文は一貫してそのテーマに取り組んでいることが認められ、研究テーマが絞り込まれていることが認められる。従来の心の「分裂」の概念の研究と考察に紙幅を割くと同時に、自験例、六例も「分裂」の概念から研究・考察され、これにもまた多くの紙幅が割かれている。

2) 論文の方法論が明確であるか

本論文は人間科学専攻の心理教育分野の臨床系心理学領域に属する論文である。臨床系心理学領域では心理臨床実践に関わる研究が中心となることが多い。その場合の方法論としては、従来の治療実践から構築された治療論を概観し、そこにある問題点を理論的に考察すると同時に、研究者自身の治療実践を提示することで、従来の治療論を批判的に乗り越えるという方法が取られる。本論文はその方法論をとっている。従来の治療論の考察、著者自身の治療実践の提示とそれらの分析研究と考察、そういったプロセスを経て、新たな治療論を構築していく方法論は極めて明確であることが認められる。

3) 研究テーマについての先行研究の調査を十分に行っているか

三部から成る本論文の第一部では、従来の研究者の中から精神病理学者、精神分析学派の研究者、分析心理学派の研究者を取り上げ、研究テーマである心の「分裂」に関する彼らの理論を集中的に考察している。精神病理学者としては、精神分裂病という名称（現在は統合失調症とされる）の生みの親である E. Bleuler の「分裂」が論じられる。精神分析学派の研究者としては M. Klein と Matte-Blanco が取り上げられ、彼らの「分裂」の概念が扱われる。分析心

心理学派の研究者としては C.G.Jung が取り上げられる。各々の立場からみた「分裂」の概念を明確にすることが試みられ、研究テーマについての十分な先行研究の調査が行われていることが認められる。それによって、心の「分裂」が意識と無意識の「分裂」に集約され、しかも無意識に関する各々の研究者の違いが明らかにされている。

4) 研究の素材となる基本文献、資料、調査データを十分に吟味しているか

論文の方法論のところでも述べたが、本論文は心理臨床実践に関わる論文である。従来の治療論を批判的に乗り越えるために、その十分な吟味と同時に、著者自身の実践例が提示されている。研究の素材であるこれらの資料、データは、先行研究の吟味に劣らず、第2部で十全に行われていることが認められる。これらの資料、データは様々な病態水準にわたるものであり、その研究、考察のために、先行研究にとどまらず、精神病理学、臨床心理学、精神分析学、分析心理学などの幅広い基本文献が吟味されていることが認められる。

5) 研究テーマについて、先行研究にはない新しい知見を打ち出しているか

本研究のテーマである心の「分裂」は、意識と無意識の「分裂」であることが明らかにされた。そして無意識をどのように概念化するかによって、「分裂」の理解が異なることが示される。治療者（著者）が分裂したクライアントの無意識をホールディングするという治療接近法を取ることによって、先行研究の「分裂」理解にはない、新たな視座としての「分裂」は深い結合に支えられており、無意識の一側面は「分裂」促進的に動くが、全体としての無意識（すなわち集合的無意識）は結合的に動くことが明らかにされた。著者が自験例を用いて明確にした治療接近法と「分裂」のなかに潜む「結合」の力が抽出されるプロセスは、極めて新しい知見であると認められる。この実践から導かれた「分裂」論は、Jung が仮説的に述べながらも、事例を提示して実証的には示さなかったことを、実証的に、つまり詳細な治療実践の提示とその分析研究から、明らかにしたと言える。よって、研究テーマについて先行研究にはない新しい知見を打ち出していると認められる。

6) その知見を裏付けるための、必要にして十分な議論と実証が展開されているか

本研究において、著者は自験例を用いて(1)新たな治療接近法と(2)「分裂」の中に「結合」の力が潜むことを明らかにしたのだが、その議論は先行研究にとどまらず、必要にして十分な基本的文献を参考にして、緻密に展開されていることが認められる。しかも多くの紙幅を割いた自験例の詳細な提示と分析には有無を言わさぬ実証性がある。理論と実践の双方を視野におさめつつ、新たな知見を裏付けるための必要にして十分な議論と実証が展開されていることは明らかである。

7) 当該分野の研究領域に新たな地平を切り開く、独創性を備えた論文であるか

本研究のテーマである心の「分裂」論は、「分裂」という事態の異常性に目を向け、その異常性を明らかにすることが従来の「分裂」研究の中心であったのだが、その従来の観点を見事に乗り越えたものである。すなわち「分裂」が常に「結合」を秘めており、「分裂」の事態から「結合」を引き出すための詳細な理論と治療実践論が明らかにされたのである。よって本論文は臨床系心理学の研究領域に新たな地平を切り開く、独創的な知見を備えた論文であると認められる。

以上の評価を踏まえて、本審査委員会は本論文を博士の学位に値するものと判断する。